

武満徹の追憶に《地平線のクオリア》オーケストラのための(2005)

江村 哲二

作曲とは聴くということ。それ以外の何でもない。このことを教えてくれたのは武満さんであった。自分の内なるところから湧き上がる音の響きにじっと耳を傾けること。それが作曲である。しかし、その響きは、あたかも地平線の上に在るが如く、それを手にしようと追いかけても、決してそれを実体として掴むことはできない。その響きは、私が私であるという証でもあり、自分という体験でしか語ることでできない「クオリア」である。そのクオリアへの果てしない憧れによって作曲家は作品を書き続けているのである。

音大を出ずして作曲家を志す勇気を与えてくれたのは武満さんであった。武満徹という存在があったからこそ今の私があるといっても過言ではない。しかし、1996年2月20日、武満さんは突如我々の前から姿を消してしまった。その追憶に捧げるべく作品をと思念を続け、すでに10年が経とうとしていた。そんな折、大野和士さんのお力添えによって、いまここにそれが実現しようとしている。

大野さんとは同じ1960年かつ同じ3月生まれ。海外では演奏されていても、日本では演奏されていない私の作品を我が国に紹介してくれたり、生きている作曲家を盛んにプログラムして下さる大野さんは、私にとってかけがえのない指揮者である。その大野さんの棒によって、武満さんに捧げる作品が、武満徹没後10周年記念の年の冒頭に、新日本フィルの皆様によって世界初演されることは、まさに感慨無量の思いである。

[楽器編成]フルート3 (ピッコロ、アルトフルート持替)、オーボエ2、クラリネット3 (バスクラリネット持替)、ファゴット2 (コントラファゴット持替)、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、ハープ2、第1弦楽器 (ヴァイオリン12、ヴィオラ5、チェロ4、コントラバス3)、第2弦楽器 (ヴァイオリン12、ヴィオラ5、チェロ4、コントラバス3)

[注] クオリアとは、我々が意識の中で感じるさまざまな「質感」を意味する哲学用語です。たとえば、赤いリンゴの赤いという感じを意味します。客観性をその立脚の場とする現在の科学的方法論では記述できないとされています。

江村 哲二 / Tetsuji Emura

1960年3月生まれ。兵庫県西宮市出身。1992年にワルシャワ・フィル主催・第2回ウィトルド・ルトスワフスキ国際作曲コンクール(審査員:ウィトルド・ルトスワフスキ)にて、オーケストラのための《インテクステリア第5番》が第1位を受賞し注目を集める。続く1993年には、ヴァイオリン協奏曲第2番《インテクステリア》が東京都制施行50周年記念国際作曲コンクール(審査員:ジョルジ・リゲティ)に入選し、さらに翌1994年には、武満徹・黛敏郎両氏の推挙により第4回芥川作曲賞を受賞する。また1998年には、オーケストラのための《ローレンツの蝶々》が第9回ザンソン国際作曲コンクール第1位を受賞。2000年度は岩城宏之音楽監督オーケストラ・アンサンブル金沢・コンポーザー・イン・レジデンスを務めた。管弦楽曲を主要作品に、色彩豊かな音色を特徴とする彼の音楽は、フランス・「ノルマンディの10月」音楽祭、同・メッツ音楽祭、ドイツ・ラジオSFB音楽祭、同・「シュレヤーンの秋」音楽祭、イタリア・アカデミア・ポローニャ音楽祭、ヴェネズエラ・フェスティバル・ア・テンポ、ISCM国際音楽祭など、海外で広く演奏・放送がなされている。

現在、金城学院大学人間科学部教授(作曲学)のほか、愛知県立芸術大学音楽学部非常勤講師(音楽学)、東京工業大学大学院非常勤講師(認知科学)として後進の指導にもあたっている。作品はビョード社(パリ)、全音楽譜(東京)などから出版されている。横浜市在住。

公式サイト<http://www.tetsujimura.com> 公式ブログ<http://tetsujimura.blogzine.jp>



Photo: Noriko Emura